

『突発性対人依存症』

脚本：小笠原恵 半田美幸 今富佐保

2018 オートポイエーシス論
課題「22世紀恋愛論」

登場人物

- ラン (19) 大学に入学したばかりの女の子。寝ても覚めてもサークルの先輩であるカイのことが気になってしまう。
- カイ (20) ランと同じ大学に通う二年生。サークルで知り合ったランのことが気になっている。
- 女医 (29) 精神科の医師

概要

晩婚化や若者の恋愛への興味の低下が年々加速し、時代を追うごとに恋愛をする動機も薄れていた。やがて恋愛自体が全くなくなり、他人に思いをよせることが病気として扱われるようになった。そんな時代に起きたある若者たちのお話。

1. ランの紹介

ラン 「私は、大学一年生のラン。最近入ったサークルの先輩、カイ君に出会ってから、カイ君を見るだけで、胸が苦しく、痛くなってしまった。カイ君に会ってなくてもカイ君のことが一日中忘れられなくて、ぼーとしちゃうし夜も眠れない、食事もうを咽を通らない。友達にも、「顔赤いよ、大丈夫？」「ぼーとしてない？」と心配されてるし…これってやっぱり病気なんじゃないかな？
そうだ、病院に行ってみよう！」

2. 病院

女医 「先ほどお聞きした症状と検査結果からドーパミンが多く出過ぎています。この症状からすると「突発性対人依存症」ですね。セロトニンが含まれているお薬と、感情を忘れさせる点滴を打ちましょう。」

ラン 「はいお願いします…」

女医 「では今から治療始めますね～ランさんの症状が出た時のことを思い出してください。」

ランは女医に言われた通り、症状のきっかけであるカイとの記憶を徐々に思い出す。

ラン 「(あーあの時傘一緒に入ったなあ。落ち込んでる時、励ましてくれたなあ。カイ君といるとすごく楽しいなあ。それから…)」

女医 「はい、終わりましたよ」

ラン 「あれっなんか体がすっきりした。カイ君のこと考えても胸が苦しくない！ありがとうございます！」

女医 「じゃあお薬は1日1錠と、症状が出た時に飲んでください。お大事に～」

ラン 「はい！」

3. ランとカイの再会

ラン 「あっカイ君だ」

カイ 「ランちゃんおはよう！」

ラン 「あっおはようございます！」

カイ 「そういえばこの間楽しかったね！また遊びに行こうよ！」

ラン 「そうですね！友達だれ誘いますか？」

カイ 「えっ俺はランちゃんと二人で遊びたいな〜…」

ラン 「え？二人だけですか？」

カイ 「あれ？ランちゃんなんか顔赤くない？」

ラン 「嘘！また症状が出ちゃった…薬飲まなくちゃ！」

カイ 「えっ待って、何の薬？」

ラン 「私カイ君といるとおかしくなっちゃうんです。一緒にいるだけでキドキしちゃったり、カイ君のことを考えると夜も眠れなくて…こんな私おかしいですよ、ごめんなさい…」

————♪CHE.R.RYをフェードイン————

カイ 「ランちゃん、その気持ちは病気じゃないよ。」

ラン 「えっ？」

カイ 「俺も同じ症状が出るんだ。でも俺はその気持ちを大事にしたい。」

ラン 「でも、こんなに辛いのが耐えられない。やっぱり病気なんじゃ…」

カイ 「でもさ、俺、ランちゃんと一緒にいるとすごく安心するんだ。お互いこんな気持ちになれるなんて、俺たち特別じゃない？周りからどう思われるか分からないけど、この症状と向き合ってみようよ」

ラン 「こんな気持ちはじめて…この感情は何だろう…」

カイ 「何だろうね…」

二人は不思議そうに笑っておしまい。